

生きていくのに必要のないこ
ともするのが人間。その個性が
社会とぶつかった反作用が、趣
味や嗜好、文化です。個別文化
主義も、グローバル化の反作用
として起こっている。ふつうの
日本人は、国際社会の経験や、
自信がない。日本の文化的アイ
デンティティを主張できずに、
これでいいやと居直って自分の
人生を良しとする。でも、他者
や世界に対する関心を忘れては
いけない。この両面的な感覚が
あると、理解力が高くなるが、
自分流の価値を主張するパワー
は弱まる。「これで良いのか」と
いう思いがまさに「分」の精神
でしょう。

「嗜好は愚行？ 不必要な
ことをするのが人間性であり、
文化である」

橋爪大三郎
東京工業大学教授、東京工業大
学大学院 社会理工学研究科 価
値システム専攻。1948年、神
奈川県生まれ。東京大学文学部
社会学科卒業。同大学院社会学
研究科博士課程単位取得。主な
研究分野は、理論社会学、宗教
社会学、現代アジア研究、現代
社会論など。最近の著書に、『日
本人は宗教と戦争をどう考えるか』
(共著、朝日新聞社)『その先の
日本国へ Postwar Japan and
Beyond』(勁草書房) などがある。

橋爪大三郎



現代社会を分析する

シリーズ
嗜好の
社会学

Reviews

Book 好評連載中！
モロエさんの毒舌は今月も絶好調！



乱読のかけら

おまけ

◎「世界がわかる宗教社会学入門」

橋爪大三郎著
筑摩書房 (2001年9月20日発行)
世界の宗教の解説書です。キリスト教に
関する解説は、信徒の私からみると
ちよつと問題を感じなくもない記述が
いくつかありました。日本人も世界の
宗教を知ろうという呼びかけで書か
れてはいるのですが、この本を通読
した後も、イスラム教のことなどよ
く分かりませんでした。



信濃毎日新聞

おまけ

2003年(平成15年)6月25日(水曜日) 9版 総合 2



ビシオチ
こう分析したII写真。
官庁が大きな権限を
握り政治家の立案能力
が低いため、あるはず
の政権交代がない、と
指摘。「日本人は目的
に向け合理的な手段を
探る思考が欠け、お上
に改革の身を求めない
国民にも責任がある」
「各国が自分の様式
で動き始めたのに、日
橋爪大三郎教授(社会
学)は二十四日、諏訪
市での信毎セミナーで
・経済の危機を乗り越
えるために
は、独自に
情報を分析
し判断する
必要がある
と訴えた。

大特集

日本人にとって
漢字とは何か



文筆家26人に聞く

漢字 私はいこう思う、いこう使う

今回の大特集を組むに当たって、文筆業に携わっている先生方に次のようなアンケートをお願いしました。執筆のプロは、漢字についてどう考え、漢字をどう使っているのでしょうか。

【漢字 私はいこう思い、いこう使う】

先生がご原稿を執筆される際、用いる漢字に関して、何か決めておられること、配慮されることなどがおありでしょうか。たとえば以下の質問に答える形で、またはご自由に、表現者のお立場から漢字についてのお考えをおまとめください。

橋爪大三郎

(はじめ だいさぶろう)

漢字とかなの書きまぜについて、つぎのような自分なりのルールをつくっている。

「おこなう」は、「行なう」と送る。「行う」と送ると、連用形が「行って」となり、「おこなって」なのか「いって」なのかわからなくて混乱する。

「ひとびと」は、「人びと」と書く。「人々」とすると、人が大勢いるという音感がそがれるように思うので。

送りがなの通則のようなものを決めても、あまり意味がない。漢字とかなの書きまぜる日本語の場合、誤解が起これなければどう漢字に仮名を送ってもよいはずであり、無理にひとつに決める必要はない。小学校で、「明かるい」が正しいと習ったかと思えば、今度は「明るい」が正しいと習った。どちらでもいいではないか。

もっとも、「みいだす」を「見い出す」と表記するようでは困りものだ。国の規制はいらないが、書き手の相互チェックと研鑽が求められる。

(東京工業大学教授・社会学)

『Works』No.58 第9巻第1号通巻58号 p8 (株)リクルートワークス研究所 2003.6.10発行

社会学者は
こう見る



「企業がいつの間にか、「企業好感度」に変質してしまっただけでしょう。」

「就職志望度調査」から「企業好感度調査」になっちゃった?

東京工業大学院 社会理工学研究科 価値システム専攻・教授 橋爪大三郎氏

これはまるで、「企業好感度調査」ですね。回答している学生たちは、実際に入社しようと思っていない。受けても入れない。この会社はよきそうか、というイメージで答えているんでしょう。タレントの好感度調査と一緒にです。タレント調査は意味がある。上位のタレントを番組やCMに出せばいい。でも、企業好感度調査に、何の使いみちがあるのだろう。最近は何で三で目みちがあるの。学生が日常的に密着した企業が並んでいます。消費者への露出が低くても、真面目に技術革新を進め、合理化と生産性向上に努めている企業が沢山ありますが、そういう企業には全然目が向いていない。視点が無いし、情報もない。無理もない。こういうアンケートがあるの、上位にある企業は優良企業で、就職できれば自慢になる、という本末転倒の現象が広まっているのではない。就職するなら、世評はそれほどでなくても実力と将来性がある企業を狙うべき。バンドワゴン効果(猫もしゃくしち)にさらされてはダメなのです。メディアや学生の日常に縁の深い企業が上位に入る傾向は、昭和50年代から顕著です。昭和40年代の大学進学率は10%台前半で、大学に行くのはごく一部の若者でした。その頃は、こういう調査も実際の就職を反映していたと思います。いまは2人に1人が大学生で、大学を出ても有名企業に就職できると限らない。大学生も一般大衆と同質化してしまっただけ、当初の「就職志望度」がいつの間にか、「企業好感度」に変質してしまっただけでしょう。



NEW WAVE

橋爪大三郎さん

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授(社会学)

橋爪大三郎さん(はしづめだいさぶろう) DAISABURO HASHIZUME
1948年、神奈川県生まれ。現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。1972年、東京大学文学部社会学科卒業。1974年、東京大学大学院社会学研究科修士課程卒業。1977年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。1989年、東京工業大学工学部助教授(社会学)、1995年、東京工業大学工学部教授就任。著書に「こんなにかた」政治の教室」ほか多数。近著に「その先の日本国へ」「日本人は宗教と戦争をどう考えるのか」(島田裕巳共著)「心」はあるのか」がある。

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻VALDES(ヴァルデス)とは何か? 迷走する日本社会を再組織するために、21世紀は新しいタイプの社会的リーダーが求められている。文系、理系の学問的区分を越えたジェネラリスト、価値判断と意思決定の両方における卓越した能力を持つ現実問題へのスペシャリストたちの養成の場として1996年、東京工業大学大学院社会理工学研究科に新たに創設されたのが、国内初の大学院プログラム・VALDES(Value and Decision Science: 意思決定学)。高度な価値判断に基づく困難な意思決定を迫られているリーダー。その孤独な意思決定を、関連するあらゆる学問領域からサポートし、それをよりよい選択に結びつけるための実践的なトレーニングを積む教育の場である。VALDESのトレーニングの柱は、数学(問題の数理的な把握と分析)と哲学(自然言語による合意形成の技術)、文理の融合、数学と哲学の融合、学問と実践の融合、この三つの理念を掲げている。

■ VALDES新設の背景と必要性

___ VALDESは国内初の大学院プログラムですが、創設の理由を教えてください。
日本はいま、困ったことだらけですが、とくに深刻なのがまず、リーダーの不足。そして、リーダーの資質の不足。それどころかこの世界でも、問題解決にすぐれた資質を持ったリーダーが必要だという自覚がなく、その必要性もわかっていない。これでは日本の社会を正しい方向に導けない。こういう危機感から、社会のネオ・リーダーを育成するために、大学院のプログラムを構想しました。

___ では、リーダー不在の原因と現状はどのようになっていますか?

日本のリーダーは「おみこし」と言われていてね、企業だったら課長・部長、中央省庁だったら課長補佐など、バリバリ線

有意義な人生を送るツールとして歴史、文学、哲学、つまり価値というものを見つめるべきなんです

21世紀のネオリーダーが待ち望まれている。しかし、リーダーは自然に生まれるものではない。東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻VALDESは、文系、理系の学問の垣根を越えたジェネラリスト、価値判断と意思決定の両方に卓越した能力を持つ現実問題の

スペシャリストたちの養成の場として展開する、国内初の教育プログラム。同大学院教授で、社会学者、言論人の橋爪大三郎氏に、日本が抱える諸問題と、新しいリーダーが求められている理由をお聞きした。

の人たちは、実は責任のある立場にないんです。そこから書類が上にあがって、ハンコがベタベタ並んでいき、最後にめくら判を押すのがリーダー。組織のいちばん下から入って、リーダーになる訓練なんて何もせず、退職間際にトップになってしまい「つつがなく過ごそう」という担がれているだけでいいパターンですね。ルーチンワークの官僚組織だから、これでなんとかなっている。でも、いまはどんな組織も、環境が激変し、将来を見通して大事なことを決めなくては行けない。日本はそういう意思決定のできるリーダーを育てるのがほんとうに下手。いい例が、文系/理系の区別です。高校で、数学ができるから理系、できないから文系、と分けてしまう。そのまま大学を出て企業に入り、理系の人間は技術部門で研究開発などに従事する。経理も法律もさっぱりわからないから、企業を離れて独立なんができない。文系も同じで、人事や総務や法律はわかるけども、肝心の科学技術がわからないから、やはり会社をつくれな。どちらにしても、会社に依存する会社人間、組織依存型の人間が増えるばかりなわけです。

___ 文系・理系の垣根を越えたジェネラリストが不足し、かつ組織依存型の人間が増えている。だからネオ・リーダーが必要だ、というメッセージの発信も重要なテーマですね。

大企業や中央省庁や自治体のトップ、

それに政治家。こういう人びとは、すべてのことに通じていることが望ましい。すべてのことに通じていなくても、それぞれの分野のエキスパートを、プレーンとして使いこなせなければならぬ。そういうリーダーって、どこにいます? いないでしょう。いないなら、育てばいいんです。もちろん、東工大だけでは、人数も足りません。けれども、手をこまねいているわけにはいかないの、こういうリーダーが必要だというメッセージをちゃんと伝えよう。何人かでもそういう人間を育てよう。そう考えたのが、出発点です。

___ いま直面している問題はわかりませんが、次の世代のリーダーを育てるのに時間がかかる。5年後、10年後を見渡して教育していく人も大事ですね?

確かに時間がかかるかもしれない。だから、次の世代に期待している。教育を重視するのはそのためです。これが教育プログラム。とは言え、いまの社会そのものも、一刻も早く変えていかなければならない。社会構造のプログラムとして提案できると思います。たとえば企業だったら、人事のシステムを変えとか、中途採用を増やすとか、外国人に対する差別をなくすとか、組織の柔軟性を増やしていく。組織が柔軟になれば、個人にとって選択肢が増える。選択肢が増えれば、自立性と自由度が高まって、幸福になる。けれども、個人が企業を選ぶ

けれども、企業だって個人を選ぼうになる。賃金が下がったり、失業したりするかもしれない。会社に貢献していないのに、同期と同じように昇給していく、なんてことは当然望めなくなる。それが当たり前だったのです。

___ VALDESの実践プログラムと今後の展開を教えてください

たとえば今年、「価値システム学応用」という講義を、外務省の前事務次官、川島裕氏に担当いただいています。この講義は、安全保障、歴史問題、経済的利害など、さまざまな要因を踏まえううえで、現実の具体的な状況の中で「君ならどうする?」と学生に問いかけるものです。別の考えの人がいた場合、どのように説得するのか、反論するのか、も学びます。ビジネス・スクールとはひと味違った、ケースメソッドです。前提と目的がはっきりしている状況で、意思決定のプロセスに責任を持つ。こういう訓練は実践的で、日本人に欠けていたものです。

___ 今後は、社会の側の理解と期待も大事になります。産業界や官庁と提携して、将来必要とされるすぐれた人材を、今のうちから養成していくことが理想です。企業や官庁側から「こういう寄付講座をつくって、こういう人材を送り込むから、こういうトレーニングをしてくれないか」というような提案があると、さらにうまくいくのではないかと。また、海外の大学の研究機関との提携も進めていきたい。



橋爪大三郎研究室
<http://www2.valdes.titech.ac.jp/hashizm/text/>



東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻VALDES
<http://www.valdes.titech.ac.jp/WelcomeJ.html>



橋爪氏著書紹介
「心」はあるのか：シリーズ・人間学1
ちくま新書 定価630円＋税
心は、「心」そのものとしてはありえない。その理由を論理的に展開する。言語派社会学を掲げる著者が「心」の存在を多角的に検証し、常識を鮮やかに覆す一冊。

NEW WAVE

橋爪大三郎さん

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授（社会学）

それには、英語など国際的なコミュニケーション能力、国際的なリーダーシップが必要になります。国際舞台で活躍している教員に、大学院のスタッフとして加わってもらって、英語で授業を行なう。英語のトレーニングも行なう。これも、目指しています。

■ 危機感、自己責任、価値を見つめる姿勢に欠ける日本人

戦後、お金持ちになることを全体の目標として掲げてきた日本が、その目標を達成したあと、次にどこへ向かっていったらいいのか、社会も政治も家庭でも誰も教えてこなかったのでは？

それは価値観の問題ですね。どうやれば幸せになるんだろう？ お金が大切だ。「いい成績を取って、一流の大学に入り、一流の会社に入る。それが幸せというものですよ」と、みんなが思った。何ともイージーですね。どうやって幸せになるかは、他人に聞いたり、教えてもらったりすることではなくて、自分自身がめいめいこういうものだとな納得するものです。自分の人生なんだから。それは学校で教える問題じゃない。家庭の問題かもしれないが、最後は一人ひとりの問題です。そういうふうには思い切らなきゃいけない。自分で信じるものをつくりださなくては、この問題は解決しないんです。でも、それをまったく怠ったわけですね。本来、こういう問題を解決するためにこそ、人間には、哲学や歴史や文学、つまり人間についての深い洞察が必要なんです。

それらのものは学校でなく、個人が自らの意志で学ぶべきものでは？

学校は、それらのものも「教えている」と言うでしょう。なぜ教える？ 試験に出るからです。試験に出るから覚えなさい、試験に出ないから覚えなくていい。試験

政治も経済も官僚化し、無責任になっている これを根本から覆そう

は学校に不可欠なものです。大人がそんなふうには考えれば、子供もそのように考えるわけです。そこに深いニヒリズムが生じる。「哲学も歴史も文学も、結局自分とは関係ない。試験で苦しめられるばかりで、自分が幸せになるのに役に立たない」と思ってしまう。とんでもない。実は、そうしたものは、人間が一生懸命に「自分は何のために存在しているのか？」とか「どうすれば幸せになれるのか？」とか「どうしたら人にわかってもらえるのか？」とか「どうしたら人を理解できるのか？」とかについて、もっとも英知ある人びとが考えを尽くし、努力して導き出してきた知恵の結晶であり、その記録です。これらをひもとく作業は、一人ひとりで何かの結論を出そうという場合、真っ先にやるべきことです。だから学校で教えている。試験に出るから教えるのではない。そこが転倒しているわけです。

みんなが自分の頭と言葉で考えることが大切ですね。

歴史をふり返れば、問題解決をさばり、真剣に取り組まなかったために滅びた文明や国家が、山のようにあります。「試験が終わったから、もう問題を考えない」では、なんの未来もありません。ここで提言したいのは、もっと真剣に生きようではないか、ということです。これもこの大学院の教育プログラムの、メッセージに含まれています。歴史とは何のためのものか？ 現在をよりよく生きるためのもの、です。文学とは何のためのものか？ それは、誰のためでもない、自分を深く見つめるためのものですね。哲学とは何のためのものか？ それは、ものごとを正しく考えて、他の人びとと討論し、共に

より有意義な人生を送るためのものです。そういうツールとして、歴史、文学、哲学、つまり価値というものをみつめるべきなんです。そしてそれはリーダーだけではなくて、誰もがやるべきことではないでしょうか。

誰も自身のアンデンティティーを確立しておかなければいけませんね。

そうですね。重要なことは、これからどういう構造の、どういう存在になるのか、といったイメージがちゃんとあって、そのためにいったんドロドロになって、自分のアイデンティティーをもう一度定義し直すこと。そういう苦しまの時期が必要。日本はいま、そういう苦しまの最中かもしれないですね。ただ、苦しまの時期は、出口が見えていないと、エネルギーが湧いてこない。だから出口を見つけようじゃないか。そのために苦しもうじゃないか。「こっちがいい、いや、あっちがいい」と、議論しようではないか。さもないと苦しまが永遠に続いてしまう。実は、答えを知っている人なんていないんです。答えを知らなくてもいろいろ言うのは簡単で、それは評論家です。でも、そうこうしているうちに、破産する人もいるし、自殺する人もいるし、くれる子供もいる。みんな苦しんでいる。長期的なことを考えなくてはいけないが、同時に「いま、この瞬間に、何をやるのか？」についてつぎつぎアイデアを思いついて、適切に手を打っていないと、長期的な問題も解決しない。そういった危機感や切迫感が、やっぱり日本には足りないと思います。

もうひとつ重要なのは、自己責任です。他人の金だと、ひとは無責任になる。たとえば官僚。税金を預かっているだけで

から、正しい決定をしようという動機に乏しい。自分の金なら真剣に考えるし、適切な理性もはたらく。財務省が国民の税金を財政投融资として運用し、運用に失敗したからといって、役人は平気ですよ。むしろ何もしないで、去年と同じにしていれば、自分の身は安泰だ。そうすると、積極的にリスクを背負って運用しようという意欲もわかない。要するに、政治も経済も官僚化し、無責任になっているわけ。これを根本から覆そう。これがすべてに共通する姿勢です。自己責任の論理で、自分の足で立ち、自分の頭で考える。この原理を貫くことが、大学院「価値システム」の課題ですけれども、日本の課題でもあるし、人類永遠の課題ではないでしょうか。

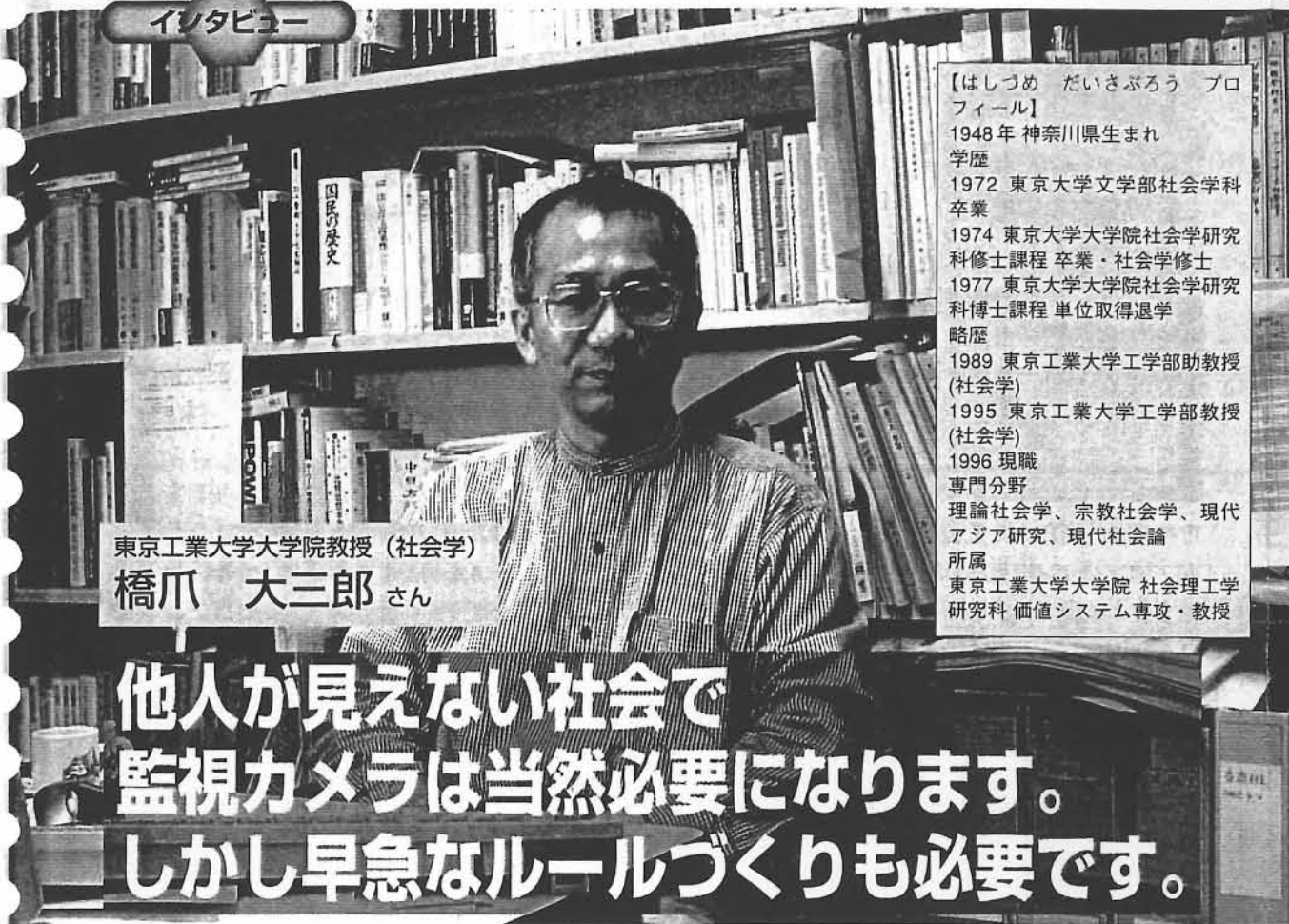
日本が抱える問題と、問題解決の能力を持ったリーダーの必要性など、とてもよくわかりました。本日はどうもありがとうございました。

[取材を終えて]

稀代の論客は時に激しく、時にやさしく日本の諸問題を解きほぐしてくれた。日本のリーダーに欠けている資質とは、裏返せば各自が勝ち取ることでできる可能性にあふれた資質でもある。自己責任に立脚した人間になるための手がかりは、橋爪さんの言葉の中に波打っている。そのしぶきを受け、体内に染み込ませる作業は、思うほどつらいことではないはずだ。

text by 藤瀬良太

インタビュー



東京工業大学大学院教授（社会学）
橋爪 大三郎 さん

【はしづめ だいさぶろう プロフィール】
1948年 神奈川県生まれ
学歴
1972 東京大学文学部社会学科卒業
1974 東京大学大学院社会学研究科修士課程 卒業・社会学修士
1977 東京大学大学院社会学研究科博士課程 単位取得退学
略歴
1989 東京工業大学工学部助教授（社会学）
1995 東京工業大学工学部教授（社会学）
1996 現職
専門分野
理論社会学、宗教社会学、現代アジア研究、現代社会論
所属
東京工業大学大学院 社会理工学研究科 価値システム専攻・教授

他人が見えない社会で 監視カメラは当然必要になります。 しかし早急なルールづくりも必要です。

——ここ最近、犯罪が増加する傾向にあります。橋爪 もともと社会は、安全なものではなかったんです。中世を考えてみても、海賊や山賊がうようよして、通行の安全は保証されていない。どうにか安全だったのは、村の中。莊園など、顔見知りで一致団結しているところだけでした。戦国時代になると街道の整備や一円支配が進んだ。一国一城の領主がいて、領国の安全に責任をもち、面で支配するようになりました。中世が終わって近世になったのですが、これは世界的に見てもたいへんすばらしいことだった。外国と接していなかったことも幸いして、セキュリティが確保された社会になっていった。しかしその代償として、移動が厳しく制限されていたんですね。農民は全員、旦那寺に登録された。お伊勢参りに行くときなども、関所を通るのに通行手形がある。パスポ

ートみたいなものです。町々には木戸があって、夕方になると閉めてしまう。朝に開くまで、夜中は移動できないんですね。犯罪者も移動できなくて、安全が確保されていた。でもこれでは、資本主義になりません。

明治政府は、移動を自由にしました。身分の移動も自由。居住地や職業の選択も自由になって、やっと日本も近世から近代に脱皮したわけです。でもこれでは、犯罪の温床になりかねない。そこで、武士を警察官に採用するとか、徴兵制をしとか、義務教育を普及するとかいろいろ工夫して、犯罪率の低い社会をつくることに成功しました。戦前から戦後まで日本の犯罪発生率は低く、検挙率は高かったのです。

よく考えてみると、日本の会社、学校、地域社会などはみな、村のようにできていたんです。会

社の年功序列など、移動もあまりしないほうがいいことになっていました。どんな組織にも不文律があって、法律でなくても、お互いの行動を監視していたわけです。学生は学生らしく、公務員は公務員らしく、主婦は主婦らしくしなければいけなかった。「らしい」かどうかは、ほかの人が見て判断するんです。

このシステムが高度成長のあと、消費社会になって壊れてしまった。

——かつてのような安心できる社会はもう手に入らないのでしょうか。

橋爪 いまの社会で安全を手に入れるには、監視しかなければいけない。監視とは、監視カメラなど監視の技術による監視です。伝統的な日本家屋と、マンションを比べてみるといいのです。伝統的な日本家屋では、学生や田舎から出てきたサラリーマンなどは、賄いつきの下宿に住んで、部屋はふすままで仕切られているだけ。大家さんに親身に相談に乗ってもらえるかわりに、変なことはできませんでした。もちろん爆弾の製造なんてできない。日本家屋は、周囲の監視の目が行き届くわけです。ところがワンルームマンションになると、家主は遠方に住んでいて家賃は銀行振込みだし、隣室の住人が誰かもわからない。エレベーターや通路など、周囲を監視カメラで監視してもらわないと、犯罪に遭ってもわからないような状況があります。そこまでして、かつてと同じレベルの安全が、やっと確保できることになる。

最近、犯罪の検挙率がずうっと下がってきました。いろいろ理由があるでしょうが、従来型の捜査では、ますます検挙率は下がるいっぽうだ。

そこで新たな決め手は、生体認証システムを採用いれ、犯行現場から犯人の生体情報を採取することだと思います。指紋は手袋されちゃうとだめ。顔認証も覆面されたら使えません。でもいくら犯人が気をつけても、髪の毛やフケなど生体の一部は現場に残るのです。これを集めて識別するのは、とんでもない話と言われそうですが、そうやって遺伝子解析ができれば、指紋よりも確実に犯人を特定できる。

——遺伝子情報を登録するわけですか。

橋爪 本人を確実に特定する方法は、いろいろあります。古典的なのが指紋。掌紋もあります。新顔としてはアイリス（瞳）。顔認証も、監視カメラと連動して浮上しています。声紋もある。真打ちは遺伝子でしょう。理想的には、全人類の生体情報データベースをつくる。つぎに犯行現場のデータと照合する。監視カメラがあれば顔認証、指紋があれば指紋、遺留品があればそこから蛋白質を取り出して遺伝子情報を集める。そこから得た情報を、データベースでソートすると、一発で犯人が特定できる。それが理想です。

そこまでいなくても、前歴のある犯罪者、有罪判決を受けた者、逮捕された被疑者の生体情報でデータベースを構築しておけば、かなり検挙率は上がるでしょう。

本当に確実に犯罪を減らそうと思えば、ゆくゆくは国民が全員、生体情報を登録するのがいいわけです。でも実際にそうするかどうか、たいへんな議論をしないとイケないでしょうね。

——監視にしても生体情報の登録にしても人権問題にいきあたると考えられますが。

橋爪 犯人がもともと人権侵害をしているわけなので、それを追及する犯罪捜査の過程で人権侵害が起きやすい。尾行や聞き込みなんかされたら迷惑だし、警察から電話がかかってきてもいい気持はしない。逮捕や取り調べとなればなおさらです。でもこうしたことは、刑事訴訟法などで規制されている。監視技術の発達によって、捜査と無関係に、重要な情報が蓄積されている場合が増えた。

たとえば、犯罪多発地帯に監視カメラを設置して、画像のデータをストックしているような場合。指紋も機械的に照合ができるようになって、ますます重要になった。外国人の指紋押捺みたいなやり方が国民全員に適用されれば、捜査ははかどる。泥棒に入られた場合、家族の人と混乱するといけないから家族全員の指紋を出してくれますか、と指紋が採られて、もしかしたらそれが警察のデータベースに入っているかもしれません。こういうやり方は、もし個人情報が必要もないのに

第三者に知られないということも人権と考えると、人権侵害になってしまいます。

重要なのは、自由との兼ね合いです。自由とは、自分の生命、財産、権利を自分で決定できること、それを他人にとやかく言われたい、侵害されたいことだと思わなければならない、たとえば何月何日どこまでパートの何売り場を歩いてたでしょとか、そんなこといちいち誰かに知られたら、やり切れないでしょう。でも、中世の農村や下町の長屋みたいな共同体のなかでは、そんなことは日常茶飯事だったんです。そういうところでは、近代的

自我とか、自由とかは侵害されっぱなしだった。それが都市化し、個人化して、自由が充分に手に入るようになった結果、犯罪者が自分の情報を公権力に知られないで、他人の人権を侵害する自由も発生してしまったんですね。これが放置できないとなると、どうすればいいのか。それには、全体の自由度を少し下げ、監視の度合いを少し上げて、犯罪を、許容できる限度にまで減らすようにする。

犯罪をゼロにしようとするのは、超監視社会になってしまいますから、非現実的です。かと言ってまったく監視しなければ犯罪天国になってしまう。犯罪がやり得になれば、犯罪者が横行して社会の損失が増え、都市がさびれてしまう。結局大きなコストがかかるのです。

——現在、商店街などでも監視システムが設置されはじめ、監視のルールづくりも必要とされていますね。

橋爪 どういう場合に誰を監視してよいのか、というルールが問題です。監視は従来、事件が起きると捜査当局がやっていたが、予防という意味ではやっていなかったんですね。いま設置している監視カメラは、予防を念頭においており、捜査当局とは関係ない。銀行やコンビニ、商店街、エレベーター、個人住宅などいたるところに設置されています。

近代社会では、捜査当局（市民の代理人）がど



うふるまうかに関するルールはさんざん議論されて、刑事訴訟法や裁判の規則にまとまっている。国家が人権を侵害しないようにというルールができています。ところがいまは、AさんがBさんを監視し、BさんがCさんを監視し、CさんがAさんを監視しているという、市民の相互監視に関するルールづくりなので、これから議論していかなくてはいいけないでしょうね。

先ほどの生体情報に関連して、別の問題も考えられます。たとえば保険に加入する場合。遺伝子情報で、あなたは50歳になったら必ず糖尿病になるという人と普通の人とでは、同じ条件で保険に加入すべきなのかという議論がありますよね。週末だけのドライバーは自動車保険料が安いとか、顧客のセグメント化はいまでも普通です。無事故無違反のドライバーも安くて当然。反対に事故ばかり起こして、仕事でもプライベートでもクルマに乗っている人は高くなるでしょう。健康保険でも病気になる遺伝子があるとわかれば、合理的な保険料の設定ができるわけです。しかし、こういう遺伝子情報は、第三者に知られてしまうと自分に不利益になる。でも髪の毛が1本あればそういう情報がわかってしまうわけで、当然ルールが必要になってくる。議論はされていますが、まだ結論が出たとは聞いてません。犯罪捜査とは無関係ですけど、生体情報がいろいろ使われている例です。その情報を手に入れることで、利益を得る人

もいる。保険会社や、相手の個人情報を手に入れたらいい人。利益を得るということは、お金を払うということで、ビジネスになってしまう。

——個人情報ということでは、ネット社会でも問題が噴出しています。

橋爪 住基ネットのこともいろいろ言われていますね。住基ネットで一番大事なことは、日本人全員に番号がついたということなんです。個人に番号がついていないと、あちこちで集めた情報を一元化することができない。クレジットカード番号と電話番号とパスポート番号、年金番号がまったく無関係では、同姓同名の人もたくさんいるわけですから、集約できない。ということは、ちゃんとしたデータベースが作れない。基本となる数字があれば、一発でソートをかけられます。

住基ネットは、将来、行政サービスを充実させるためにも犯罪捜査のうえでも、基本的なインフラだと思わすけど、重要なのは市役所の窓口のサービスの内容ではなくて、番号を割り当てたことなんです。ひとりの人間がいるという事実、番号を割り当てなければ、コンピュータのなかに再現できない。番号をつけるから検索が自在にできるようになって、そこにこれからデータをぶらさげていくわけです。

たとえば、税務申告の領収書で、支払い元と支払い先に番号がふってあれば、経理の明細がガラス張りになって、あっという間に名寄せができる。本来ならGDPの5%は消費税で納税されないといけないのに、かなりが消えてしまっているのも、番号がないからなんです。運転免許証やパスポートにもこの番号をつけるとかして、はじめて本来の性能が発揮されます。犯罪検挙率の向上にも、大いに貢献すると思います。暴力団の構成員やスリや窃盗の常習者にも、全員番号があるわけですから、移動しても追尾が簡単になります。

——ひとことでいって、監視カメラのある社会と

はいい社会なんですか。監視のない社会がいい社会だとか、そういう問題ではないと思います。



監視カメラは、必要だから増えたのであって、誰が命令したわけでもない。コストもかかるし、いろいろ考えたうえで、個別に設置しているわけです。うとうしいと言えうとうしいが、犯罪が増えるよりは監視カメラが増えたほうが、はるかに望ましいのは明らかです。

ただルールづくり、モラルづくりは後手後手にまわっていますね。監視カメラの映像を別な目的で使ったり、職務上知り得た情報を第三者に伝えたりしないということが、最低限のモラルになると思う。情報を提供するとすれば、裁判所の命令や警察の要請があった場合に限り、この情報を二次利用させる。警察への捜査協力については、いまは重要犯罪であれば、頼まれれば原則として情報提供しているようですね。それが監視カメラの目的ですから、いいだろうと思うのですが、写っている人にとっては個人情報ですから、微妙なケースもあるわけです。そのためにももっと話し合っただけでルールづくりをしていかなくてはいいけないと思います。

監視は、不信から来ています。そこではなかなかモラルが確立されにくいんですね。安心や安全をもたらしてくれるものとして、もっと議論があっただけではないのでしょうか。

——今日はお忙しいところ、ありがとうございます。

